

○最新知見報告、特に圓の字の第13画に係わる詳報！

# 旧5円金貨明治3年明瞭鱗（切り鱗）の徹底的研究

島村 一雄

## 1 まえがき

旧5円金貨明治3年の手変りに  
ついては、筆者は、文献1)におい

て、明治初期の他の年号も含め、  
基本的な解説を試みた後、文献2)  
において、明治3年銘に絞った詳  
細情報について報告を行い、さら  
に、文献3)において、対象を明瞭  
鱗（重ね鱗）に絞った報告を実施  
している。文献3)の報告を行った  
理由というのは、文献2)が、網羅  
的に様々な情報を詰め込んだ結  
果、情報が錯綜し、不明瞭鱗、明  
瞭鱗（切り鱗）、明瞭鱗（重ね鱗）  
の3種それぞれについては、どう  
なのかという点でわかりにくい内  
容となっていたため、まずは、明  
瞭鱗（重ね鱗）のみを対象として、  
画像とともに詳細に紹介したいと

考えたためである。この報告によ  
り、明瞭鱗（重ね鱗）の手変りの  
状況が、より明確になったのでは  
ないかと考えている。

ところで、同じく明瞭鱗である  
切り鱗は、彫刻の出来栄えの見事  
さの観点では、明瞭鱗（重ね鱗）  
に及ばないものの、切り鱗独特の  
彫り方による味わい深い美しさが  
あり、鑑賞の対象として遜色ない  
ものであるばかりか、明瞭鱗（重  
ね鱗）にはない変異も多く見られ、  
手変りの研究対象としても大変面  
白いものである。

今回の報告では、文献3)の延長  
線上として、対象を旧5円金貨明  
治3年明瞭鱗（切り鱗）に絞り、  
画像を豊富に用い、十分なスペー  
スを割きながら、文献2)以後の研  
究成果も含め、手変り最新情報と

## 2 検討方針

して取りまとめ、広く公開するこ  
とを目的とするものである。

されている。

一方、旧5円金貨明治3年明瞭  
鱗（切り鱗）の菊紋面については、  
有輪、縁どりの2タイプがある。  
切り鱗については、重ね鱗にある  
ような、無輪は、存在しない。この、

旧5円金貨明治3年明瞭鱗（切  
り鱗）は、年号面に関しては、微  
細な点を除き、模様、図形に係わ  
る特段の大きな変化はなく、比較  
的安定しており、文字列の中で、  
圓の字の第13画、すなわち、「く  
にがまえ」の一番下の横棒に、正  
圓、欠圓、欠圓補刻の3種がある  
ことが、主要な変化である。この  
点については、筆者は、当初（文  
献2）から主張してきたところで  
あり、今日でも、その見解は変っ  
ていない。その他の点では、圓の  
字中「貝」の字の変化、三の字の  
部分的な変化等が、文献2)で報告

有輪、縁どりの2タイプは、日章  
の相違のみであり、有輪、縁どり  
で、桐葉、菊葉、御旗、菊紋に特  
段の相違はないと言ってよい。菊  
紋面についても、これら有輪、縁  
どりの2タイプの中で、模様、図  
形は比較的安定しており、「逆へ  
ゲ玉」のような特殊な手変りを除  
けば、特段の大きな変化はないと  
言って差し支えないと思われる。

旧5円金貨明治3年明瞭鱗（切  
り鱗）の手変りの概要は、上記の  
ようなものであるが、この金種に  
特徴的な手変りで、しかも、さま



(a) 年号面



(b) 菊紋面：有輪



(c) 菊紋面：縁どり

図1 旧5円金貨明治3年明瞭鱗（切り鱗）の一例

さまざまな変化に富み、研究対象として興味深いものは、圓の字の第13画の変化をおいて他にはないであろう。この、圓の字の第13画に、正圓、欠圓、欠圓補刻の3種があることは、上記の文献1)及び2)にすでに記載されているが、文献2)以後の検討で、細部をより詳細に見てみると、特に、欠圓補刻において、いろいろなタイプがあることがわかってきた。このため、本報告では、主として圓の字の第13画に焦点を絞り、検討を行うものとする。

なお、旧5円金貨明治3年の手変りの構成の概要（存在比等）については、財務省放出品により、多くの情報が得られており、文献2)に詳細を記してあるが、一部を抜粋して付表1及び付図1に示すので、適宜参照いただければと思う。

### 3 個別の解説

#### (1) 明瞭鱗（切り鱗）有輪

切り鱗有輪の中で、正圓という

のは、7・04%しかなく、かなり稀少な存在であり、なかなか、お目にかかれるものではない（図3）。ここに、正圓として、2つのサンプルを提示しておきたい（図2）。US—①A及びUS—①

Bの2枚がそれである（記号については、Uは有輪、Fは縁どり、Sは正圓、Kは欠圓、Hは補刻を意味する）。このUS—①Aのタイプは、圓の字の第13画に欠けや補刻の痕跡が全くないきれいなもので、なかなかお目にかかることはできない。US—①Bは、圓の字の第13画に関して、US—①Aほど形状が整ったものではないが、補刻の痕跡はなく、欠圓でもないもので、分類上、正圓とみなすものとする。本タイプは、下半欠三である。切り鱗有輪の中では、正圓は、かなり少なく、数を集めての比較というものは、なかなか難しいものである。

欠圓については、1・41%と有輪の中で最も少なく、収集上ネットワークになるものである。財務省放出品の中では、切り鱗有輪欠圓は、

1枚しかなかったことから、その稀少性がわかる。見かける機会は、ほとんどないため、状態を選んでの入手というのは困難なものである。UK—①は、民間由来品の中から入手したものである。

欠圓補刻は、91・55%を占め、手に取れば、ほとんどは、欠圓補刻といった状況である。UKH—①Aは、圓の字の第13画が、第1画下端右側から第2画下端左側まで、直線的に補刻され右端がわずかに盛り上がった感じになっているものである。本タイプは、変形貝Iである。UKH—①Bは、UKH—①Aと同タイプで、圓の字の第13画が、第1画下端右側から第2画下端左側まで、直線的に補刻され右端がわずかに盛り上がった感じになっているものである。

第13画に関しては、UKH—①Aと区別することはできない。本タイプは、変形貝IIである。UKH—①A、UKH—①Bは、ともに、圓の字の第13画が水平に直線的に補刻され、文字断面の高さが低いタイプである。UKH—②は、第